

特別支援学級の児童生徒が 自ら目標を設定し、主体的に取り組む授業づくり

— 学習の見通しをもつ活動を通して —

個別最適な学び（特別支援教育センター）研究会議

神山 幸也¹

新井 理央²

市川 悠輝³

本間 瑠衣⁴

要 約

令和3年1月の中教審答申では、2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が示された。背景には、近年における子どもの多様性の量的・質的な拡大がある。そのため、一人一人に応じた学習（指導の個別化）や、児童生徒自身が自分に合った学習を進めていく（学習の個性化）という、双方からなる個別最適な学びの充実が、より一層求められている。

学習指導要領「総則」には、「児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること」とある。その解説編では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるに当たって、特に主体的な学びとの関係からは、児童が学ぶことに興味や関心をもつことや、見通しをもって粘り強く取り組むこと、自己の学習活動を振り返って次に繋げることなどが重要になる」と、述べられている。

特別支援学級担当者会にて、特別支援学級の教師494名に「見通し」についてのアンケートを実施した。「行動の見通し（活動の仕方、手順、スケジュールやタイムラインを提示）」を提示することについては、現在多くの学校で実践がなされていることが分かった。しかし、「学習が終わったあとには「何が得られるか」を提示したり、説明をしたりしているか」という質問における回答のパーセントは行動の見通しに比較すると下がっており、「学習の見通し」を児童生徒に提供することについては、不十分だと考えられる。

以上のことから、本研究会議では「児童生徒が、単元目標に応じて個人の目標設定と振り返りを行うことにより、学習の見通しをもって主体的に学ぶことができる」という仮説を立てた。そして、その研究仮説に迫るために3つの方策を立てた。「1：振り返りシートの工夫（振り返りから目標設定の仕方にバリエーションをつける）」、「2：目標を意識する支援の工夫（言葉かけ・視覚化・共有化）」、「3：動機付けの工夫（効果的な目標設定と振り返りをするために）」である。

検証授業においては、市内小学校支援学級、中学校支援学級の児童生徒が目標をどのように設定し、また設定した目標に対し主体的に学習したのかを追った。児童生徒の姿や取り組んだワークシートや振り返りシート、児童生徒へのアンケートやインタビューを用いて分析、検証した結果、児童生徒一人一人が自分で選択したり、考えたりして決めた目標を意識し、主体的に取り組む姿が見られた。また、目標設定と振り返りによって児童生徒自身から動機付けが行われるという可能性が見えてきた。

キーワード：個別最適な学び、小・中学校特別支援学級、振り返り、動機付け、見通し

目 次

I 主題設定の理由 ……………54	2 研究の方法……………58
1 はじめに ……………54	3 研究の実際と考察……………60
2 本市の現状と課題……………54	III 研究のまとめ ……………69
3 研究の方向性 ……………55	1 研究から見えてきたこと……………69
4 研究主題の設定 ……………58	2 今後の課題 ……………70
II 研究の内容 ……………58	参考文献 ……………72
1 研究の対象……………58	指導助言者 ……………72

¹ 川崎市立中学校教諭（長期研究員）

² 川崎市立小学校教諭（研究員）

³ 川崎市立中学校教諭（研究員）

⁴ 川崎市立特別支援学校教諭（研究員）

※児童生徒の個人情報保護のため、学校名を記載しておりません。

I 主題設定の理由

1 はじめに

(1) 『個別最適な学び』と『協働的な学び』の 一体的な充実に向けて

令和3年1月の中央教育審議会答申では、2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が示された¹（図1）。背景には、近年における子どもの多様性の量的・質的な拡大がある。児童生徒の多様化の現状として、特別な支援を必要としている子どもの増加がある。そのため、一人一人に応じた学習（指導の個別化）や、児童生徒自身が自分に合った学習を進めていく（学習の個性化）という、双方からなる個別最適な学びの充実がより一層、求められている。

令和3年3月に文部科学省から示された「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料（以下、「参考資料」とする）」には、「児童生徒が学習の目標や教材について理解し、計画を立て、見通しをもって学習し、その過程や達成状況を評価して次につなげるなど、学習の進め方を自己調整していくことができるよう、発達の段階に配慮しながら指導することが大切」²と、示している。増田（2022）は、『『個別最適な学び』自体の『目的化』を防ぐためのキーワードが、『自己調整』だ。子どもが自分自身の学習を「自己調整」しながら学びを進めることができるようになることを目的にするとよい³と、述べている。

浅野ら（2025）は、「参考資料」に示されている学習過程にOECDのEducation2030に示されるAARサイクル⁴を繰り返すことで、個別最適な学びを実現することができる⁵と考えた。実践では「AARの一枚」を作成し小・中学校特別支援学級で、児童生徒が自己調整をして学ぶ姿を求め検証授業を行った。児童生徒が単元目標を常に意識して学習を進める様子が見られたものの、小集団における検証が十分とはいえず、本市の小・中学校特別支援学級の個別最適な学びの在り方をあきらかにするには実践が不足していた。これらのことから、引き続き実践検証が必要だと考えた。

2 本市の現状と課題

(1) 対応すべき主な教育課題

全国的に特別な支援を必要とする児童生徒が増加している。川崎市も同様に、「かわさき教育プラン」第1期実施計画期間（平成17年度～平成26年度）から引き続き特別支援学校や小・中学校の特別支援学級に在籍する児童生徒は増加し続けており、今後もその傾向は続いていくと予測されている（図2）。



図1 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実
（イメージ）（文部科学省 2021 の図より）

¹ 中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）2021年

² 文部科学省「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」2021年 p. 20

³ 増田謙太郎『学びのユニバーサルデザインUDLと個別最適な学び』明治図書2022年 pp. 82-83

⁴ OECDが提唱する学習プロセスで、Anticipation（見通し）- Action（行動）- Reflection（振り返り）の3段階を繰り返すことで、変化の激しい時代に必要な「自己調整能力」や「コンピテンシー（資質・能力）」を育む考え方

⁵ 浅野英介「特別支援学級における児童生徒の自己調整する姿を求めて—「AARの一枚」の活用と自立活動—」令和6年度研究紀要第37号 川崎市総合教育センター pp. 53-72

令和4年3月に発表された「かわさき教育プラン第2次川崎市教育振興基本計画第3期実施計画」では「さまざまな障害に応じた専門的な教育や、一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援、適切な教師配置、教育環境の整備等が課題」⁶と書かれている。文部科学省は令和3年1月「新しい時代の特別支援教育の時代の在り方に関する

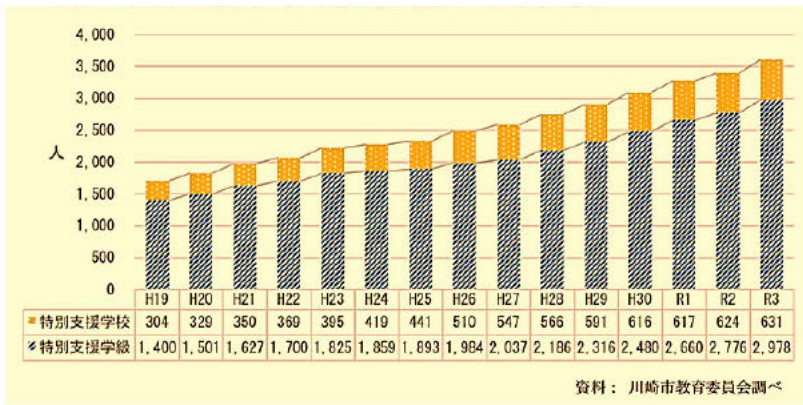


図2 市立特別支援学校・特別支援学級在籍者の児童生徒数の推移

有識者会議」の資料の中で「特に、児童生徒の実態に応じて教育課程が異なる場合のある特別支援学級では、各教科等での目標が異なる児童生徒を同時に指導する実践力が求められる。」⁷としている。

これらのことから、児童生徒数の増加した特別支援学級において、目標が異なる児童生徒の集団における指導に課題があると考えられる。

(2) 本市で働く教師の「個別最適な学び」へのイメージ（令和6年度の研究から）

浅野ら（2025）⁸は、市立小・中学校の特別支援学級と特別支援学校の151名に「個別最適な学び」の捉え方を把握するため、アンケートを実施した（令和6年4月実施）。その結果、個別最適な学びに対するイメージや課題等についての自由記述では、ネガティブな感情が表現された文章の割合がポジティブを上回った。単語出現頻度によると「難しい」のスコアが高く、記述内容からも教師が「個別最適な学び」の具体的なイメージをもてずにいるなど、個別最適な学びの実現に対して難しさを感じていることが読み取れるアンケート結果であった（表1）。

表1 自由記述における「難しい」を含んだ回答の一部（浅野2025）

それぞれに合った学習のスタイルが持てるので良いが、どんな方法の学び方があるのか、教師側が把握することが難しい。
みんなそれぞれ違う特性をもっているの、実際にはなかなか難しいところもある。
指標がないので何ができればいいの、次に何に進めばいいのが経験のある方とない方では、指導計画を作っていくうえで難しいと思う。
理想に掲げたいキーワードですが、現実的にはまだまだ実現するには難しいイメージがある。

3 研究の方向性

(1) 昨年度個別最適な学び（特別支援教育）研究会議の研究について

浅野ら（2025）は、文部科学省「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」に示されている学習過程に OECD の Education2030 に示される AAR サイクルをあてはめ、「A 学習の目標や教材について理解する」「A 見通しをもって学習する」「R 過程や達成状況を評価して次につなげる」という活動を繰り返すことで、個別最適な学びを実現することができる考えた。各活動の中で児童生徒が自身の目標を意識して取り組み、振り返りを行えるように

⁶ 川崎市教育委員会「かわさき教育プラン第2次川崎市教育振興基本計画第3期実施計画」2022年 p.51

⁷ 文部科学省「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 報告」2021年 p.15

⁸ 浅野英介「特別支援学級における児童生徒の自己調整する姿を求めて—「AARの一枚」の活用と自立活動—」令和6年度研究紀要第37号 川崎市総合教育センター 2025年 pp.53-72

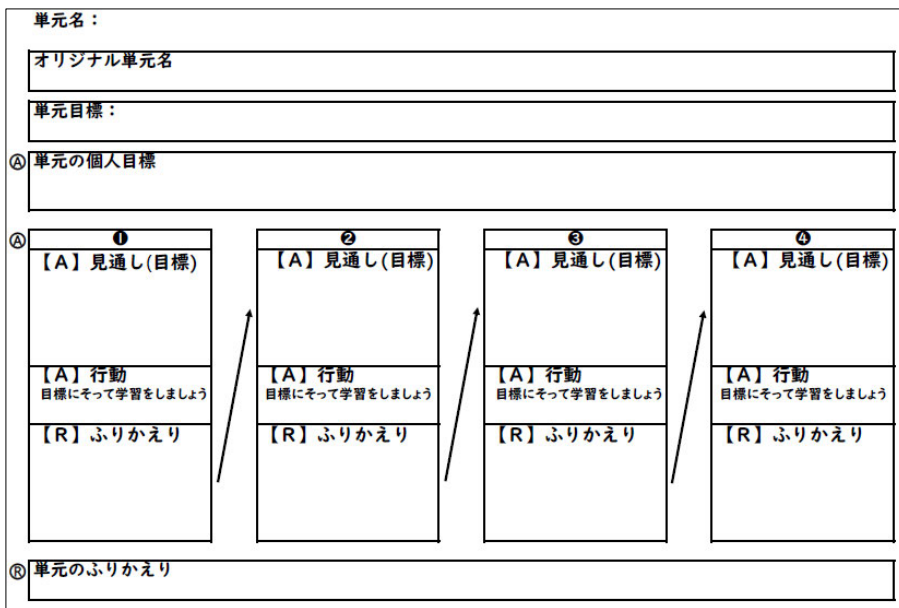


図3 AARの一枚（浅野 2025）

「AARの一枚」を作成（図3）し、授業実践を行った。

「AARの一枚」を活用することで、その時間に達成できなかった目標を次時の枠に書き込むなど、児童生徒が単元や題材のまとまりを意識して授業をとらえる姿が見られた。また教師もAARサイクルを意識することで単元目標に向かう支援ができたとしている。

（2）見通しについて

学習指導要領解説総則編では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるに当たって、特に主体的な学びとの関係からは、児童が学ぶことに興味や関心をもつことや、見通しをもって粘り強く取り組むこと、自己の学習活動を振り返って次に繋げることなどが重要になる」⁹と、述べている。

太田（2012）は「子どもにおいては、授業の初めに『見通し』を立てることが『振り返り』につながり、『学習内容の確実な定着』に結び付くことから、『見通しー学習ー振り返り』という学習過程が重要になる」¹⁰と述べている。また、「授業展開のまとめ（振り返り）の時間について『振り返り』の時間を充実させることは、その日の学習をよりよきものに変え、次時への意欲を生み出すことになる」¹⁰と言及し、「見通し」と「振り返り（まとめ）」の効果を説いている。

池田ら（2022）は、中央教育審議会（2016）の、「学習評価において教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるためにも重要である」¹¹を引用し、「児童生徒自身による学習評価の充実が提起された」と述べている。また「この提起を授業者側の視点で捉えると、児童生徒に何が身に付いたかを明確にしなが、児童生徒自身が主体的に次の学びや生活に生かすことのできる目標設定と振り返りの在り方を検討し、その充実に向けた授業改善が求められていると言える」¹²と目標設定と振り返りについて整理している。

これらのことから、本研究においても、見通しと目標設定・振り返りに着目した活動を取り入れることとした。

⁹ 文部科学省「学習指導要領解説 総則編」第1章「教育課程の編成及び実施」

¹⁰ 太田正己『知的障害教育の授業展開 「まとめ」をきちんとすれば授業の効果が上がる学習活動「見直し・振り返り」と評価』ジアース教育新社 2012年 p.27, p.42

¹¹ 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」2016年

¹² 池田和馬ら「知的障害特別支援学校における「振り返り」に焦点を当てた授業改善ー共通実践事項の設定とその実状況の評価を通してー」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 第44号 2022年

(3) 見通しについてのアンケートより

表2 見通しについてのアンケート・詳細

本研究会議においては見通しについて、「行動の見通し」と「学習の見通し」を区別し、捉え直すことにした。「行動の見通し」とは、活動の仕方や手順、スケジュール等を提示し、児童生徒が何をすればいいかを分かることと考えた。対して、「学習の見通し」は、目標を意識したり、目標を達成するための手段を自分で考えたりするなど、児童生徒自身が目標達成のために何をすればいいか分かることと考えた。

右記のように、小・中学校特別支援学級の教師を対象にアンケート調査を実施し、494名の教師からの回答を得ることができた(表2)。

行動の見通しについては、45%の教師が「あてはまる」、51%の教師が「ややあてはまる」と回答し、96%の教師が行動の見通しについて工夫をし、実践を行っているということが分かった。小・中学校特別支援学級では、児童生徒がスケジュールやタイムラインを理解しやすくするために様々な工夫がなされており、視覚的な提示、事前の説明や予告が重要な要素として理解されていることが分かる(図4)。

学習の見通しについては、16%の教師が「あてはまる」、62%の教師が「ややあてはまる」と回答した。行動の見通しについての取組と比較すると、「あてはまる」と回答した教師の割合が低い結果となった。また、「あてはまる」という回答の中に、「ホワイトボードにねらいを書き、必ず授業のはじめにやることを確認する」という回答や「活動の手本を見せる」「手順を示す」といった行動の見通しと関連する回答も見られた(図5)。

アンケート結果から見てきた研究の方向性として、特別支援学級における個別最適な学びにおいて、児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を取り入れた実践を積み上げていく必要があると考えた。

<見通しについてのアンケート>
 回答期間：2025年7月22日～9月2日
 回答数：494名 (n=494)
 対象：特別支援学級(小学校・中学校)
 回答項目：「あてはまる」、「ややあてはまる」、「ややあてはまらない」、「まったくあてはまらない」という4件法で行った。

質問項目：
 「見通し」について、お伺いします。質問にお答えください。

<補足>
 本研究会議では、児童生徒自身が自ら学習の目標を設定するために『見通し』について着目しています。
 見通しを2つに分け『行動の見通し(活動の仕方、手順、スケジュールやタイムラインを提示)』と『学習の見通し(①:何ができるようになるか、②:何を学ぶか、③:どのように学ぶか)』と捉えています。

・行動の見通しについて
 ◇【質問】:子どもたちに「行動の見通し」をもたせるような工夫をしていますか。

・学習の見通しについて
 ◇【質問】:子どもたちに「学習の見通し」をもたせるような工夫をしていますか。

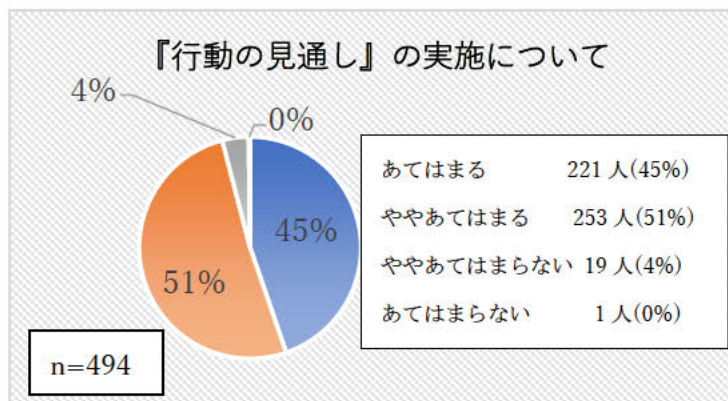


図4 「行動の見通し」の実施について/ 第2回特別支援学級担任者会アンケートより

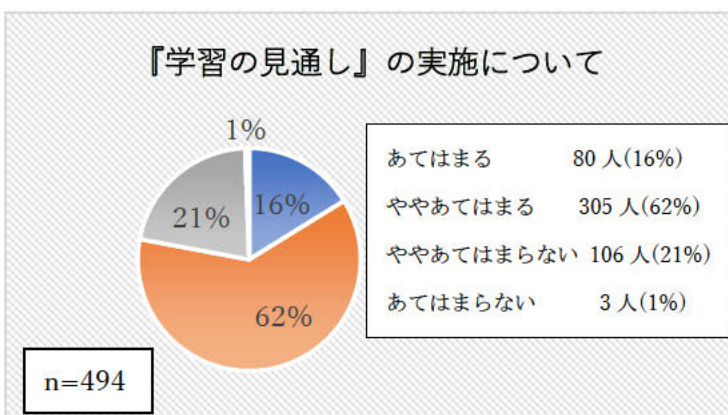


図5 「学習の見通し」の実施について/ 第2回特別支援学級担任者会アンケートより

(4) 「学習の見通し」と「個別最適な学び」の関係：学習の見通し×個別最適な学び

「学習の見通し」と「個別最適な学び」との関係について調査した。

クロス集計をした結果(表3)、「子どもたちに『学習の見通し』をもたせるような工夫をしていますか」の質問において、「あてはまる/ややあてはまる」と回答した教師は、「あなたは『個別最適な学び』を、子どもたち一人一人に実践できていますか」の質問において「あてはまる/ややあてはまる」の回答が多かった。このことから、教師が児童生徒に学習の見通しをもたせることが、個別最適な学びにつながると考えられる。

表3 クロス集計 「学習の見通し×個別最適な学び」

		個別最適な学び (n=494)				合計
		あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	
学習の見通し	あてはまる	14 17.5%	57 71.3%	8 10.0%	1 1.3%	80 100.0%
	ややあてはまる	13 4.3%	242 79.3%	48 15.7%	2 0.7%	305 100.0%
	ややあてはまらない	1 0.9%	72 67.9%	26 24.5%	7 6.6%	106 100.0%
	あてはまらない	0 0.0%	1 33.3%	1 33.3%	1 33.3%	3 100.0%
	合計	28	372	83	11	494
	割合	5.7%	75.3%	16.8%	2.2%	100.0%

パーセンテージについては、学習の見通しについての回答の中での割合を示す。

4 研究主題の設定

本研究では、児童生徒が単元目標に応じて自ら目標設定をし、振り返りを行うことにより、学習の見通しをもって主体的に学ぶことができるという研究仮説を立てた。小学校・中学校特別支援学級の集団の中で、個の力を伸ばす指導について検討していく必要があると考えた。以上のことから、研究主題を次のように設定した。

特別支援学級の児童生徒が
自ら目標を設定し、主体的に取り組む授業づくり
— 学習の見通しをもつ活動を通して —

II 研究の内容

1 研究の対象

本研究会議では、研究員所属の市内小・中学校特別支援学級に在籍する児童生徒を対象とした。今回の研究では、集団における個別最適な学びを実現する授業づくりを研究するため、集団(小集団)での授業を行っているクラスでの児童生徒の変容を見ていく。

2 研究の方法

(1) 研究の方策

検証授業を10月末から一単元の授業で行った。また、その際に研究仮説に迫るため、【方策①】【方策②】【方策③】を実践することにした。

① 振り返りシートの工夫(振り返りから目標設定の仕方にバリエーションをつける):【方策①】

特別支援学校学習指導要領解説(2018)には、「児童生徒が自主的に学ぶ態度を育み、学習意欲の向上に資する観点から、各教科等の指導に当たり、児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように工夫する」¹³こととある。

¹³ 特別支援学校学習指導要領解説(2018)

本研究において「学習の見通し」は、目標を意識したり、目標を達成するための手段を自分で考えたりするなど、児童生徒自身が目標達成のために何をすればいいかわかることとし、目標設定と振り返りの場面で活用できるシート（以下、振り返りシート）が必要だと考えた。

各学校ごとに児童生徒の実態が異なるため、本研究会議で「振り返りシート」の必要な要素を考え、それらを基にそれぞれの学校ごとに個別に作成した（表4）。

表4 振り返りシートの要素

<p>1：何ができるようになるか（ゴール、目標、向かうところ）が載っている</p> <ul style="list-style-type: none"> ▷ 自分で（選び）決めた目標の欄もある。 <p>2：今どこにいるのか、が分かる（今回の授業は、単元として何回目なのか。視覚的な支援が存在している。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ▷ 「見通しをもつ」ことができるように、毎時間の目標と振り返りに連続性が生まれるようなレイアウトを採用。 <p>3：次回への（自分で決めた）目標の欄がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ▷ それが次回、自分自身の「目標・めあて」になる。過去の（前回の）自分を意識して、授業を始めることができる。 ▷ 前回から今回にかけて、前回の授業を思い出すことにも使用できる。 <p>4：子ども自身で選ぶことができるシートである</p> <ul style="list-style-type: none"> ▷ 何を選んだのか把握できる（シートの種類はどれか／GIGA 端末を使用する／筆記する形式のもの）
--

② 目標を意識する支援の工夫（言葉かけ・視覚化・共有化）：【方策②】

浅野ら（2025）は、「教師が児童に対し単元目標や本時目標を確認するよう促す言葉かけを意識的に行うことで、児童が目標を意識して活動する場面が多く見られ、このような単元目標に向かう支援ができたことが、児童生徒が単元目標を意識して学習に取り組む姿につながった」¹⁴と報告している。本研究においても、児童生徒が目標を意識しながら授業に参加し、教師は児童生徒が立てた目標を意識して支援することを大切にする。

目標を意識する支援の工夫について、本研究会議では「言葉かけ」「視覚化」「共有化」の3点について、教師が意識し授業内での工夫をすることとした。目標を意識する「言葉かけ」については、授業のはじめ、展開の場面、振り返りの場面と授業全体を通して、子どもが目標を意識したり、思い出したりできるように教師が意図的に行った。「視覚化」については、目標を意識できるように板書を消さずに残しておいたり、電子黒板を使ってスライドで提示したりするようにした。「共有化」については、授業の最後にクラスメイトが立てた目標、できたところやできなかったところまでできるようになりたいと考えたことなど、次の目標を伝え合う時間を設ける工夫をすることにした。

③ 動機付けの工夫（効果的な目標設定と振り返りをするために）：【方策③】

授業を考える際の視点として、児童生徒が効果的な目標設定と振り返りをするために、「どのような動機付けが有効か」を検討した。目指すところは、「児童生徒一人一人が、どのように取り組むかということをも自分自身で選択ができる、自立した力を身に付けていく」ための視点である。

浅野ら（2025）は、「児童生徒の意欲が高まったことで、単元の目標に向かって自らの学習をすすめていく姿が見られた」¹⁵と、見取ることができた児童生徒の姿にも言及している。

研究会議においても、児童生徒が主体的に学ぶ姿を目指すうえで意欲や動機付けの重要性が話し合われた。小学校特別支援学級においては、学習活動自体が楽しいものであったり、やってみたいと思われ

¹⁴ 浅野英介「特別支援学級における児童生徒の自己調整する姿を求めて―「AARの一枚」の活用と自立活動―」令和6年度研究紀要第37号 川崎市総合教育センター 2025年 pp.53-72

¹⁵ 浅野英介「特別支援学級における児童生徒の自己調整する姿を求めて―「AARの一枚」の活用と自立活動―」令和6年度研究紀要第37号 川崎市総合教育センター 2025年 pp.53-72

たりすること、未来のために役立つと感じられることが重要な要素として挙げられた。また、中学校特別支援学級においては、卒業後の進路が関わってくることを踏まえて、将来につながることや、生徒自身が学ぶよさを感じられたり、自己肯定感が高まったりすることが挙げられた。このように、どちらも児童生徒の発達段階や一人一人の実態に応じて、動機付けを工夫することが重要であると確認した。

(2) 検証の方法

授業において、「学習の見通しをもって主体的に学ぶ児童生徒の姿」を仮定し、【方策①】【方策②】【方策③】を実施した中でその姿が見られたかどうかを観察し、分析する。また、実践開始前後のアンケートや、授業後に行った児童生徒へのインタビューについても必要に応じて分析を行う。これにより「児童生徒が、単元目標に応じて個人の目標設定と振り返りを行うことにより、学習の見通しをもって主体的に学ぶことができるという」研究仮説を立証できると考えた。

3 研究の実際と考察

市内小学校の特別支援学級、市内中学校特別支援学級において、実践研究を行った。

(1) 小学校特別支援学級の実践

① 児童の実態（クラスの実態）

○授業時：小学3年生～6年生 児童6名（内訳：6年生1名、5年生2名、4年生1名、3年生2名）

○授業者（担任）：1名（T1）

② 単元名：大事な情報を落とさず伝えよう・聞き取ろう 教科：国語

③ 単元の目標

- ・身近なことを表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うとともに、言葉には 意味による語句のまとまりがあることに気付き、語彙を豊かにできる。 [知識及び技能]（小1、2年/(1)/オ）
- ・共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解できる。 [知識及び技能]（小1、2年/(2)/ア）
- ・身近なことや経験したことなどから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選んでいる。 [思考力、判断力、表現力等]（小1、2年/A/(1)/ア）
- ・話し手が知らせたいことや自分の聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもっている。 [思考力、判断力、表現力等]（小1、2年/A/(1)/エ）
- ・言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする。 [学びに向かう力、人間性]（小1、2年）

④ 単元計画

日	時	主な学習活動	指導上の留意点と手立て（・）と評価（☆）
11/5	1	問いの設定 単元のねらいの確認 本時の予定の確認 活動（「友だちはどこかな？」） 本時の振り返り 単元の目標設定 ・・・ 振り返りシート 「単元目標設定用のシート」	<ul style="list-style-type: none"> ・導入で、教師による分かりにくい伝え方から、「どのような情報を選んだら伝えたり聞き取ったりしやすいか」という問いを設定できるようにする。【方策③】 ・本時の予定を示し、活動の見通しをもてるようにする。【方策③】 ・活動では、最初に各自で問題作成に取り組んでから、順番に問題を出す役を回すようにする。 ・単元の目標設定では、「聞く」「話す」の目標を示す。【方策①】 ・単元の目標設定では、根拠をもって目標設定を行えた児童の考え方を取りあげ、全体で共有する。【方策②】 ☆重要な情報が何かを考えて話したり、聞き取ったりしているか。 ☆単元のねらいをもとに、単元の目標を自ら立てられているか。

11/12	2	本時の予定の確認 前時の振り返り（動画）	・本時の予定を示し、活動の見通しをもてるようにする。【方策③】 ・導入で、前時の活動の様子を振り返る動画を提示する。【方策②】
11/19	3	本時のねらいの確認 （2：その人の居場所を伝える） （3：その人の特徴を伝える） 本時の目標設定 活動 本時の振り返り ・・・ 振り返りシート 「本時の目標設定用のシート」	・本時の目標設定では、具体化した目標の選択肢を示す。【方策①、②】 ・活動では、最初に各自で問題作成に取り組んでから、順番に問題を出す役を回すようにする。 ・ねらいに則した言い方、言葉を取り上げて価値付ける。【方策②】 ・振り返りでは、達成度やその理由の選択肢を示す。【方策①】 ・振り返りでは、根拠をもって振り返りを行えた児童の振り返りを取り上げ、全体で共有する。【方策②】 ・次時のねらいを確認する。【方策③】 ☆本時のねらいに基づき、重要な情報の要素を用いて話したり、聞き取ったりしているか。 ☆前時の取り組みをもとに、目標を自ら立てられているか。 ☆本時の取り組みをもとに、理由をもって振り返られているか。 ☆本時の取り組みをもとに、次はどうしたいかを考えられたか。
11/26	4	本時の予定の確認 前時の振り返り（動画） 本時のねらいの確認 （4：他の人と異なる特徴を選んで伝えよう） 活動 単元の振り返り ・・・ 振り返りシート 「単元振り返り用のシート」	・本時の予定を示し、活動の見通しをもてるようにする。【方策③】 ・導入で、前時の活動の様子を振り返る動画を提示する。【方策②】 ・本時のねらいを示す。【方策①、②】 ・活動では、最初に各自で問題作成に取り組んでから、順番に問題を出す役を回すようにする。 ・ねらいに則した言い方、言葉を取り上げて価値付ける。【方策②】 ・振り返りでは、この単元の大事な知識や観点を示し、この単元でできるようになったことを振り返られるようにする。【方策①】 ・振り返りでは、根拠をもって単元の振り返りを行えた児童の考え方を取り上げ、全体で共有する。【方策②】 ☆重要な情報を選択して話したり聞き取ったりしているか。 ☆前時の取り組みをもとに、目標を自ら立てられているか。 ☆これまでの単元での取り組みをもとに、理由をもって振り返られているか。 ☆これまでの単元での取り組みをもとに、これからどうしたいかを考えられたか。

⑤ 単元における児童生徒の実態

・4年生：Aさんについて

友人や教師と会話する中で、本人自身が感じたことや考えたことを話し、質問したいことがあれば相手に伝えて聞くことができる。自分の意見を伝えることはできる一方で、相手の意図を汲み取り、他者の話を踏まえて自分の考えを伝えることは、これからの課題である。

・5年生：Bさんについて

様々な友人に積極的に話しかける様子が見られる。授業中は、自分自身の思ったことや考えたことを積極的に発言する一方で、他者の話を聞くことについては難しさをもっている。活動内容を個別に確認し理解しながら、集団の中で自信をもって授業参加することを目指している。書いて相手に伝えることは、これからの課題である。

学習の見通しをもって主体的に学ぶ生徒の姿として、「前時の成果と本時のねらいを関連付けて、本時の目標を設定したり、目標達成に向けて活動に取り組んだりしようとする姿」と「目標に関連するその日のエピソードをもとに振り返ろうとしている姿」を仮定した。

⑥ 方策について

ア 振り返りシートの工夫（振り返りから目標設定の仕方にバリエーションをつける）：【方策①】

主体的に取り組むための目標設定ができるよう、小学校特別支援学級では、授業の場面に応じて、シートを使い分けた。単元1時に使うシート「単元目標設定用のシート」と、単元2・3時で使う「本時の目標設定用のシート」、単元の最後（4時）に使う「単元振り返り用のシート」の3種類である。

「単元目標設定用のシート」(図6)には、「単元のめあて」の欄と、「単元のポイント」として学習内容を記入する欄、各自が選択する「単元の目ひょう」の欄がある。児童が単元の始めに、単元のめあてや学習すべきことを知り、目標を意識して学習に取り組めるよう作成した。

図6 振り返りシート
「単元目標設定用シート」

図7 振り返りシート/聞く」を目標にした
子ども用「本時の目標設定用シート」

図8 振り返りシート
「単元振り返り用シート」

「本時の目標設定用のシート」(図7)は、「今日のめあて」の欄、各自が選んだ単元目標に応じた「今日の目ひょう」の欄、目標の達成度とその理由、次はどうしたいかの目標を書く「ふりかえり」の欄がある。「今日の目ひょう」の選択肢は、学習内容に沿って具体的な表現を用いて児童がイメージしやすいよう配慮した。目標の達成度とその理由は選択式だが、子どもが選んだものに教師が具体的なエピソードを添えて価値付けることで、子どもが実感をもって振り返り、次にどうしたいかについて記述しやすくなるよう工夫した。

「単元振り返り用のシート」(図8)は、単元全体を振り返り、「できるようになったこと」や「かんそう」、「これからできるようにになりたいこと」の欄がある。「できるようになったこと」の欄は、「単元目標設定用のシート」の「単元のポイント」と同じ内容になるため、児童が単元の始めと終わりを比べたり、単元全体を通して振り返ったりすることができる。また、児童が選んだものに教師が具体的なエピソードを添えて価値付けることで、児童が実感をもって振り返り、次にどうしたいのかについて記述しやすいシートを目指した。その他、考えることに集中する時間を確保するために、選択式を多く取り入れた。「文字で書きたい」という児童にも対応できるように記述式の欄も設けた。

シートの取り組みやすさという点では、紙とデータの2種類の振り返りシートを用意し、児童が手書きで記入するかGIGA端末を使うかを選べるようにした。

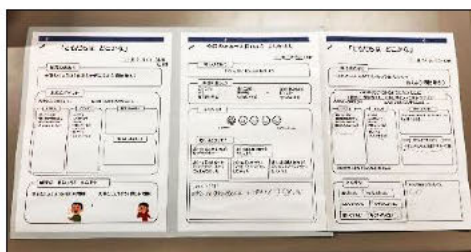


図9 「振り返りシート/まとめ方の工夫」

振り返りシートのまとめ方については、単元全体が一目で見えるように一枚の画用紙に並べて、貼り付けるようにした。今までの学習の軌跡を残しながら、単元全体を見通せる仕組みとなるよう工夫した結果、児童が学習の見通しをもち、前時の振り返りと本時の目標設定を関連付けやすくなるようにした(図9)。

イ 目標を意識する支援の工夫（言葉かけ・視覚化・共有化）：【方策②】

「何ができるようになるか」を明確に意識して授業に取り組むための支援として、授業の導入場面において「今日のためあて」をねらいとして視覚的に提示した（図10）。また、「前時の授業の取り組み」を撮影した動画を見て前回は振り返りながら、前回の取り組み方として教師からよかったポイントについて言葉かけを行った。「何を着ているかを言えていたね」「洋服の色は、どんな色だったかを言えているね」「表情の部分もどのようになっているかも伝えられていたね」「どのような場所にいるか伝えられていたね」など、聞いている相手に分かりやすい表現で伝えられていたところや、できていた部分を価値付けて、児童が目標を意識できるように言葉かけを行った。

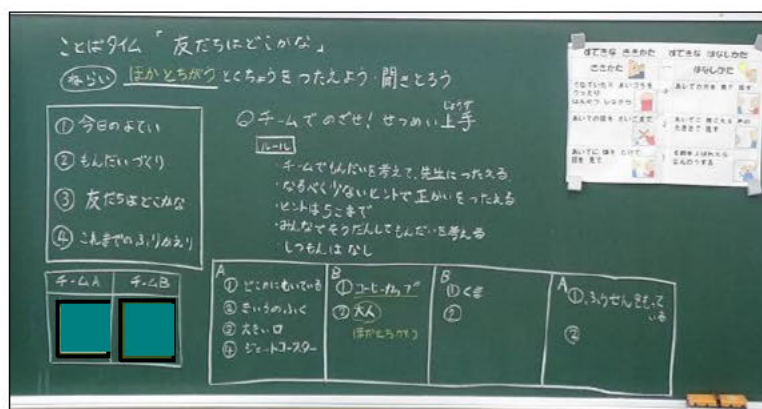


図10 授業の板書「友だちはどこかな」

授業の中では、児童が考えた伝わりやすい言葉が何であったか、どのような言葉選びをしたかを教師が児童から聞き取りながら板書し、残した。伝わりやすい伝え方や、相手が聞き取って正解できたことのどこがよかったのかをクラス全員で共有することで、一人一人が目標についてより強く意識できると考えた。



図11 次回以降のスケジュールの見通しのスライド

振り返りの場面では、次時のねらいを提示するとともに、次回の授業のスケジュールを伝えた（図11）。そのスライドには学習の見通しをもてるように目標も載せ、児童と教師が次の目標を意識できるようにしながら、授業を終えられるよう工夫を行った。

振り返りの場面では、次時のねらいを提示するとともに、次回の授業のスケジュールを伝えた（図11）。そのスライドには学習の見通しをもてるように目標も載せ、児童と教師が次の目標を意識できるようにしながら、授業を終えられるよう工夫を行った。

ウ 動機付けの工夫（効果的な目標設定と振り返りをするために）：【方策③】

単元の導入では、取り組む活動に対して、興味関心を引くようにゲーム性をもたせた。教師が取り組み方を説明する際、あえて「分かりにくい」伝え方を見せることで、児童自身が「やってみよう」「自分でもできそう」という気持ちや「どうしたら、先生よりも伝わりやすくできるかな」と児童自身が思考することをねらった。

また、授業の始まりから終わりまでを説明することで本時の流れを示した。事前に、本時を見通せるようにすることで「これならできるかも」という気持ちで授業に参加できるようにした。単元2時以降の導入場面においては、前時の授業がどのようなことに取り組んだのかを動画で確認することで、視覚的に前回の授業がどのようなものだったかを思い出せるよう工夫を行った。これらの工夫は、児童が「やってみよう」という意欲につながる動機付けになると考えた。

⑦ 授業の実際から（学習の見通しをもって主体的に学ぶ児童の姿）

Aさんは、単元の1時で設定した単元目標を「大事な情報を落とさず聞く」と設定した（図12）。そのことにより、登場人物が「何色の服を着ているか」、「持っている物のとくちよを聞き取る」など、大事な情報を聞くという目標を意識しながら、質問し考える姿が見られた。



図12 単元の目標を先生と教師と一緒に考えている場面

図13 Aさんが取り組んだ振り返りシート (11月19日)

振り返りの場面では、「つぎはどうしたい?」という次回の目標に向けた質問項目に対して、「質問を3回くらいはして正解したい」と記入していた。指導した教師は、児童が今回の授業を受けてできなかったところや、改善点を挙げて、次回への展望を記入することを想定していたため、実際にAさんが記入したことは、質問とずれているように感じられた。しかし、Aさんは授業で「よくできた」と回答しており、「ふくの色や、もようを聞き取れた」と「とくちょうを聞き取れたけど、答えが分からなかった」という項目に丸をつけていたことから、本人の中では目標を意識して取り組み、自分なりの改善点を挙げて記入したのではないかと考えられる(図13)。教師の話から対象児童の特徴として、自分の思った意見だけを伝えてしまう傾向があるため、振り返りシートに書かれている質問の意図が児童に伝わるように理由を合わせて聞くなど、教師が工夫するとよいことが分かった。

Bさんは単元1時での単元目標を設定する場面では、シートを書くことに対して、気持ちが向かない状態であった(図14)。しかし、今回の単元がどのような授業であるか、様子を見ていた。単元2時では、視覚的な支援として、授業の進め方やねらいを事前に黒板に板書しておくことで、前回の授業と流れが同じであることを伝えた。授業では、動機付けの工夫として、体験型のゲーム性をもたせることで「やってみよう」という気持ちになり、クラスメイトと一緒に参加することができた。取り組み方に慣れ、次第に振り返りシートに記入することもできた(図15)。今日の目標「近くにいる人をせつめいする」と「近くにある乗り物をせつめいする」を自ら選択した。振り返りの場面では、「よくできた」を選び、今日の自分で決めた目標の達成を意識し参加したことを振り返っていた。次回の目標を「つぎいうときに(伝えるときに)かんたんにせつめいできるといい」と、今回を振り返り、次回への展望を記入する様子が見られた。

以上のように【方策①】【方策②】【方策③】を実践することによって、児童自身が決めた目標を教師と共に意識しながら目標達成に向かって取り組み、自分自身のできたところを振り返ってシートに記入する姿や、今回の授業がどうだったかを振り返るといった姿が見られた。

(2) 中学校特別支援学級の実践

① 児童の実態(クラスの実態)

○授業時 : 中学1～3年生の生徒9名

○授業担当 : 3名(T1、T2、T3)。

② 単元名 : ディベート・①「ディベートに向けて話し合い活動しよう」 教科 : 国語

③ 単元の目標

・ディベートのやり方を学ぶとともに、意見とそれを支える理由の関係性を理解することができる。

[知識及び技能](特別支援学校中学部2段階/イ(ア))

図14 Bさんが取り組んだ振り返りシート (11月5日)

図15 Bさんが取り組んだ振り返りシート (11月12日)

- ・相手や目的に応じて、自分の伝えたいことを明確にし、説得力のある意見を述べるができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕（特別支援学校中学部 2 段階/A/イ）
- ・他人の意見を尊重しながら、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。
〔学びに向かう力、人間性〕（特別支援学校中学部 2 段階）

④ 単元計画

日	時	主な学習活動	指導上の留意点と手立て（・）と評価（☆）
10/27	1	ディベートとは何かを学び、この単元のねらいを確認する。 *オリエンテーション	・視覚的な資料を用いながら、ディベートについて説明する。【方策②】 ・動機付けを工夫し身につく力やメリットについて説明する。【方策③】 ☆ねらいを理解することができる。
10/29	2	「アニメとマンガ、どっちがいい？」というテーマについて、同じ意見の生徒で集まり、考えを共有する。	・理由の例を提示するなど、意見をまとめるための支援をする。【方策②】 ・振り返りシートを用い、生徒が自身の取り組みについて振り返りやすくする。【方策①】【方策②】 ☆説得力のある意見を述べるができる。 ☆振り返りシートを活用し、自分の課題について考えることができる。
11/05	3	「学校教育は必要？」というテーマについて、同じ意見の生徒で集まり、考えを共有する。	・振り返りシートを返却して前時に自身で考えた課題について確認し、一人一人の目標が違うことを意識させる。【方策①】【方策②】 ・自分の意見を伝えるだけでなく、他人の意見を尊重しながら話し合いを進めるように伝える。【方策②】 ☆他人の意見を踏まえて発言することができる。 ☆自身で決めた目標を、どこまで達成できたか自己評価できる。
11/10	4	「動物園・水族館の生き物は幸せ？」というテーマについて、同じ意見の生徒で集まり、考えを共有する。	・振り返りシートを返却して前時に自身で考えた課題について確認し、一人一人の目標が違うことを意識させる。【方策①】【方策②】 ・みんなの意見をグループの意見としてまとめるように伝える。【方策②】 ☆全員の意見を踏まえ、グループの意見としてまとめることができる。 ☆自身で決めた目標を、どこまで達成できたか自己評価できる。
11/12	5	「まとめ」 これまでの活動を振り返り、目標に対する生徒自身の達成度を確認する。 次回からの単元『ディベート・②』への足掛かりとした授業	・振り返りシートを活用し、単元の目標をどれだけ達成できたか振り返れるようにする。【方策①】【方策②】 ☆目標に対する自分自身の達成度を考え、その理由を述べるができる。

⑤ 単元における児童生徒の実態

・1年生：Cさんについて

本人の気持ちの中で「自信がない」と思うと、活動に取り組むことができないことがある。事前に内容を伝えておくことで、スムーズに取り組むことができる。意見を述べることは得意としており、前時の単元「時事ニュース」では、積極的に発言することができた。思い通りにいかないと情緒的に不安定になりやすく、授業へ向かう姿勢や意欲についての波がある。周囲と調和し、安定した授業参加をしていくことは、これからの課題である。

・3年生：Dさんについて

漢字で書きたいけれど分からなくて書けない、内容が難しくて答えられない、といったことがあると、授業に対しての意欲が低下することがある。授業で使用するシートをデータでも準備し GIGA 端末で入力できるようにすると、自分の考えを今まで以上に表出できるようになってきた。伝えることの経験を通して、自信をもって自分自身の意見や考えを表現することは、これからの課題である。

学習の見通しをもって主体的に学ぶ生徒の姿として、「目標を意識しながら授業に取り組み、振り返りの中で自らの課題を見つけ、自分自身で目標を考えられるといったサイクルを回すことができる」姿を仮定した。

⑥ 方策について

ア 振り返りシートの工夫（振り返りから目標設定の仕方にバリエーションをつける）：【方策①】

単元で「身に付けてほしい力」を、単元を通して振り返りシートに示した。また、そこから「今日の目標」を生徒自身が考えて記入できる欄を設けた。教師は授業の中で、単元で身に付けてほしい力のポイントについて、補足説明を行うことで理解が深まっていく工夫を心掛けた。

振り返りの場面では、生徒自身の自己評価のしやすさを考え、数値（点数化）を記入することにした（図 16）。次の授業の目標を立てる手立てとなるよう、その日の授業の気持ちを振り返り、次の授業の目標を考え記入できるようにした。

書くことに対する支援として、筆記で記入する方法か、GIGA 端末を使って入力する方法かを生徒が選択できるように用意をした。

図 16 振り返りシート / 中学校特別支援学級

イ 目標を意識する支援の工夫

（言葉かけ・視覚化・共有化） ：【方策②】

ディベートの活動の最中に、教師が生徒の考えた目標に応じて言葉かけを行うようにした。黒板、電子黒板、振り返りのシートに共通の目標を提示し、視覚的にいつでも確認できるようにした。また、振り返りの場面で T 2、T 3 の教師が、目標に沿ったよい振り返りができている生徒の振り返りの言葉をクラス全体に共有する場面を設けた。

次頁図 17 は、授業の後半部分で「目標について共有」している場面である。その会話の様子の一部を書き記した（表 5）。

表 5 共有の時間：振り返りを共有している場面

日付	誰か	教師と子どもの会話【共有：目標についての共有している場面】 *意図的に先生が紹介し、全体に共有。
11/5 3回目	T1	「こういう目標、良いんじゃない？ということを生先生方に紹介してもらおうと思います。」 ⇒T2、T3の先生に選んでもらうようにしていた。 「このグループの人たちの中で、何か気になった目標はありましたか？」 ⇒T2の先生に声をかける。
	T2	「1さんが、今回は説得力のある意見をのべることができるという目標が75点で、『なぜその点数なの？』と1さんに聞いたら、『(1さんが)自分の意見は言えただけ、説明が適当になっちゃった。もうちょっと理由が言えた』と言っていました。次の目標(の部分)で、『説得力の意見を述べたい』って、書けていたので素晴らしいと思っています。」
	T1	「素晴らしい！自然とクラス全体から拍手が起こる。「良いですね！」と、承認。 「今日の自分の行動を振り返って、このところをもっと頑張れるんじゃないかという理由もハッキリした目標だったよね。ちょっと適当になってしまった部分があったから、次はその所をちょっと頑張りたいな。点数も70点よりも高く上げられそうだなということだね。素晴らしいと思います。どんどんどんどん自分で目標を設定して、どんどんどんどん良くなっていく。そういう姿を生先生たちは見たいし、これはあなたたちにとって、とてもプラスになっていくことなので、ぜひ頑張ってもらいたいです。」
	T1	(T1からも共有) 面白いなと思ったところは、Fさんは100点だった。次回も、その100点をキープするために次回も同じように頑張りたいと書いていた。『さぼらない』ということだね(Fさん「Yes!」と答える。クラスで笑いが起こる)。そういう考え方も面白いと思います。100点では終わらず、120点、200点をやれるように頑張るのもあり「かも」しれないね。 ⇒今以上の点数を目指そうと思う子どもたちへもフォローを行っている。
	Cさん	100をいつもMAXにしておきたいから、だから繰り返すのさ。
	T1	だから100点をキープしていきたいのね。なるほど。面白い観点だと思いますよ ⇒否定せずに、肯定している。
	次回への予告: 「学習の見通し」の場面。 次回以降への見通しを 伝えている。	【次回へ予告】: 学習の見通し 「次回も同じように活動していきます。この活動は3回でおしまいです。そのあと、まとめをしたあとに、そのあとに本格的なディベートに入っていきます。」 ⇒『今回と、同じように』という見通しを提示していた。
	生徒たち	「やったー!」「ありがとうございます」という子どもたちの声。
	T1	次回のテーマは、「水族館とか動物園の生き物って幸せ？不幸せ？どっちだろうね。ということをやってみようと思います」 ⇒直近の授業内容と(次回への予告)と、先の見通しをもたせ、安心感を提供している。



図 17 T2が生徒の言葉を「共有」している場面

T1が意図的に共有の場をつくることで、「目標に向かって取り組み、どのような感想や達成や成果があったのか」を承認したり、価値付けたりしていた。これにより、生徒がお互いの目標や振り返りを聞いて、さらに目標を意識できる支援になったと考えられる。

ウ 動機付けの工夫（効果的な目標設定と振り返りをするために）：【方策③】

導入の場面で「仕事ができる人の特徴」として、コミュニケーションが上手に取れる人等を示し、この授業を通してコミュニケーション能力を身に付けていけると確認した。このように、生徒に将来役立つ学習であると伝えることが、動機付けとして効果的であると考えた。また、振り返りシートの目標の達成度を点数化することで、前回までの点数と今回の点数とを比較して振り返ったり、次の目標を設定したりすることへつながり、生徒が意欲的に学習できると考えた。

⑦ 授業の実際から（学習の見通しをもって主体的に学ぶ児童の姿）

単元2時では、Cさんは自分で目標を「みんなと協力する」と記入していた。「今日の授業は自分に何点あげられますか？」という項目に対して、点数化は難しいように見受けられた。Cさん自身が「できていない」と感じていたため点数を記入することをためらっていたと考えられた。教師が記号で書くことを提案すると「できた○、できなかった×、△は普通」と自ら決め、「△」を記入することができた（表6）。

単元3時では、教師がCさんの目標を達成できるように話し合うグループの人数を少なくした。Cさんはディベートの中で、同じグループの生徒の発言について言及するなど、協力した話し合い活動になった。振り返りの場面では「全て100点かもしれない」と発言し、

点数を付けることができた（表7、図18-①）。Cさん自身が達成感をもてたことで、自己評価について点数化できるようになったと考えられる。

表6「教師と児童の会話」10月29日/単元2時

日付	誰か	教師と子どもの会話【振り返りシートを書く場面】	生徒の気持ちに寄り添い、提案している。
10/29 単元 2時	Cさん	振り返りを書く場面（Fさん）困っている表情 「え〜、ちょっと、点数付けるの難しいんだよね」	
	T1	「そうなの？じゃあ、○、×、△にする？」 「点数付けられそう？100点満点だとしたら、何点くらい付けられそう？」	
	Cさん	「点数、難しいんだよね」	
	T1	「点数付けてほしいんだよね」	
	Cさん	「あえ〜、じゃあ全部アラビア語で書く」	
	T1	「アラビア語、すごいじゃん。アラビア数字ってこと？」（少し難れる）	
	Cさん	「象形文字で書く〜」	
	T1	（クラスみんなに向けて）「それを（目標を達成）するためには、何をがんばればいいのかなどということを、しっかり考えてみてください」	
	Cさん	「・・・（抵抗している？考えている？）」「できた●、できなかった✖、△は普通」	
	T1	「（自分で考えた目標は？など、Fさんに何か聞いている）」	
Cさん	T1が難れると、シートに向き合って、考えながら書いていた。 「鉛筆を食べる〜」と言いながら、T1の先生にかまってもらえてうれしそうな表情を見せる。		

表7「教師と児童の会話」11月5日/単元3時

日付	誰か	教師と子どもの会話【分かち合いをする前に「振り返りシートを記入」している場面】 *電子黒板には、今回の目標を視覚的に提示していた。	生徒の成果を承認している
11/5 単元 3時	Cさん	にこやかに、嬉しそうに「達成度の部分」を記入している。 「全て100点かもしれない、オレ」という発言。	
	T2	「お〜、すごい。じゃあ、その理由をここにぜひ、どうぞ」	
	Cさん	「さらにIさんの意見をね、聞けたから」	
	T1	「ちゃんとこの人の意見が良いと思うということ言えてたよね。人の意見に共感できたよね」という言葉をかけ価値付け。	
	Cさん	「他人の意見を良いと評価した」	
	T1	「今回100点だった人は、次回100点を超えるために、どんなことをがんばればいいのか考えてみましょう」（クラスみんなに対して、空に向かって言葉を伝えている）	
	Cさん	「次も100点を目指したいですとか〜、次も100点を取りたいです」	
	T1	「100点をとるために、何をがんばる？次」	
	Cさん	「前やったことを同じくする」、「前やったことを同じくする」 ⇒すぐにシートに記入をしている	
	T1	「うんうん、前できたことをね、もう一回同じようにやってみるってことだね。」 ⇒共感する	
Cさん	次回の目標の部分を書き始める。		

理由の欄については、単元2時では空欄になっているが、単元3時では記入ができた。4時では、3時同様に100点を記入した。理由の欄には「考えることが楽しかった」と気持ちの部分も書いた(図18-②、18-③)。

次回の目標設定については、Cさんは今回の授業を踏まえ、次回の目標を自ら考え記入し、意識して授業参加していることが分かる。単元3時以降も前回の授業を思い出し、目標を意識しながら「前回と同じことをする」と記入していた(図18-③)。

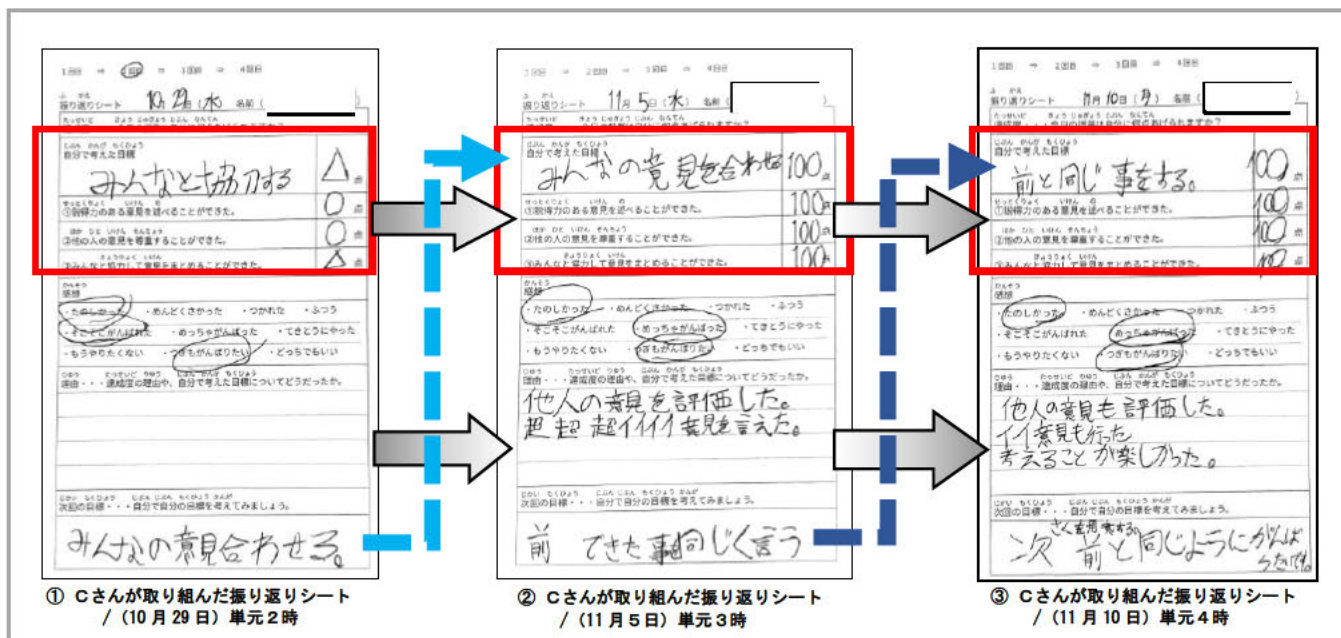


図18 Cさんの振り返りシートの変化

Dさんは、単元5時の振り返りの場面で、前回のシートを参照する様子が見られた。また、GIGA 端末で入力した振り返りシートには「前までは(目標に向かっていくことを)意識していなかったけど、目標を立ててその目標を少しでも達成しようとしていたら意識するようになっていて、前よりは良くなったので、その目標を立てなくても意識できるようになる」と入力をした。授業では、教師からの質問に対して声を表出させて答える姿が見られるようになった。授業した教師にDさんの今までの様子を聞くと「以前は、自分の意見をもっていても表現することをしなかった」と語っていた。振り返りシートに目標を記入し、過去の自分と現在の自分とを比べることで、どれくらいできていたかということについて明確になり、学びが自分のものになっていると考えられた。そのことから、Dさん自身が意見を表出することにつながったといえるのではないかと。授業後のインタビューでは、「前回の達成度を見て、今回はもう少しできたかなと思えたから点数を上げた」と、答えていた。教師の質問に対して応じる姿は、自信の表れのように見えた。

今回の検証で使用した振り返りシートには、単元を通して「①:説得力の意見を述べることができた」「②:他の人の意見を尊重することができた」「③:みんなと協力して意見をまとめることができた」という3つの目標を提示してきた。その3つの目標が、生徒自ら意識する柱となり、そのことに向かっていくことができる学習の見通しになったといえる。また、教師が生徒に寄り添い共に目標達成に向かって伴走する姿も忘れてはならない。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究から見えてきたこと

(1) 児童生徒の変容（仮説の検証）

本研究では「児童生徒が、単元目標に応じて個人の目標設定と振り返りを行うことにより、学習の見通しをもって主体的に学ぶことができる」という研究仮説のもと、市内小・中学校特別支援学級で実践を行ってきた。

ア 【方策①：振り返りシートの工夫】の視点から

小学校特別支援学級では選択肢を示したり、文言を可能な限り具体的にしたりと、取り組みやすくなるようにした。何ができるようになるかをねらっているのかイメージしやすくした。教師は、「単元における重要な情報の要素は何かを事前に想定し整理したことで、児童が発した言葉に価値付けを行うことができた」と語った。その工夫から教師も児童も共通認識をもちながら重要な情報を分かち合う姿が見られた。中学校特別支援学級では、振り返りシートに自己評価を点数で記入することで、生徒が単元の目標を意識しながら授業に取り組むことができ、振り返りの中で自らの課題を見つけ、自分自身で目標を考えられるといった主体的な姿が見られた。教師は「生徒が自身の活動を評価し、課題をみつけて目標を自分で考えることは、与えられた目標に取り組むよりも達成感を味わいやすいと感じた」と語った。

加えて、前時の振り返りが次時の目標に直結する構造は、ワーキングメモリに課題を抱えやすい児童生徒にとって、学習の文脈を維持するための有効な支援となっていた。また、児童生徒がGIGA端末を使ってシートに記入することを選択できるようにしたことで、書字が苦手な生徒であっても、学習の見通しをもって活動することができた。

イ 【方策②：目標を意識する支援の工夫】の視点から

児童生徒が目標を意識できるように、小学校特別支援学級では、授業のはじめにその時間のねらいを視覚的に示すことや、前時の活動の様子を動画で振り返る場面をつくり、その際に教師がよいポイントを伝える支援を行った。中学校特別支援学級では、振り返りシートの中で単元を通して共通の目標を示し、授業の終わりに自分自身の目標の達成度に対し、点数をつけ自己評価をする取り組みを行った。前時までの振り返りシートを自分で確認し、本時の評価を記入する姿や、前時までの点数を超えようと、目標を達成するための方策を考える姿が見られた。また、クラスメイトが立てた目標や達成状況に教師と共に触れることで目標に対する視野を広げることが可能になった。これらの支援により、単元を通して目標を意識する姿が見られた。

ウ 【方策③：動機付けの工夫】の視点から

発達段階に応じて、小学校特別支援学級では「ゲーム性や楽しさ」、中学校特別支援学級では「将来の生活への有用性」を動機付けの核とした。小学校の実践では、児童同士でチームを組み、問題を創作し出し合うという活動を取り入れたことで、前時では参加しなかったBさんも取り組むことができた。

単元の最初には、児童生徒の興味関心を引くための活動を考えたり、中学校特別支援学級においては卒業後に求められる力について教師が説明をしたりしていたが、単元が進む中で、児童生徒が自身の立てた目標を達成することや、前回までの自己評価よりも高い評価を書くことができるよう意識する姿が見られた。これは、「外発的動機付け」から「内発的動機付け」に少しずつ移行したと考えられる。その

際、教師は学習の過程において、児童生徒がどのような思考を働かせたかという点を言語化して、フィードバックしていた。中学校特別支援学級のCさんは、思考を巡らせながら振り返り、自己評価の欄を点数化し、何ができていたかを掴めたことにより、目標を意識した自分自身の意見を文章で表現することへとつながったと考えられる。これらのことから、今回の実践では目標設定と振り返りによって、児童生徒が自分自身を動機付けるという可能性が見えた。

(2) 児童生徒が目標を設定する価値

検証授業後、児童生徒に「単元の目標を意識して取り組むこと」についての意識を調査した。小学校特別支援学級の児童に対しては、検証授業後にインタビューを実施した。「ワークシートや振り返りを、筆記するか GIGA 端末を使って打ち込むかを今回選べたが、今後も選べた方が良いと思うか」という質問において、「選べた方が、やりやすい」や「選べた方がいい」と答えた。また、「目標を自分で選んで決めたり、自分で目標を立てたことについて」は、「目標を自分で決めたり、選んだりすると授業がしやすい」や「意識して取り組むことができる」「それならできると思える」「できると達成感を感じる」と答えた。「何のためだったら、授業を前向きに頑張れるか」の質問においては、「自分の生活に役に立つためだったら、頑張れる」や「生きていくための力になるなら」と答えた。

中学校特別支援学級の生徒に対して検証授業の前と後にアンケートを実施すると、「目標を意識してしっかりとやれた」、「目標を理解できた」と回答している。「学習

表8 「検証授業前後での児童生徒へのアンケートより」

児童・生徒		国語の授業が、どれくらい分かっていますか？	それを選んだのは、なぜですか。	学習した内容について、わかった点や、よくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか？
Dさん	前	まあ分かっている	内容がちょうどいいから	まあ 当てはまる
	後	まあ分かっている	目標を意識してしっかりやれた	とても 当てはまる
Cさん	前	よく分かっている	漢字めっちゃ知ってるから。	あまり 当てはまらない
	後	よく分かっている	目標を理解できた。	まあ 当てはまる

した内容を次の学習につなげることができているか」の質問に対しても「まあ当てはまる」から「とても当てはまる」等のポジティブな変容が見られた(表8)。また「あなたにとって、今回や次回の授業に向けた目標を自分自身で立てて学びを進めていくことは、充実感や満足感、達成感につながったか」の質問に対して「とても当てはまる」や「まあ当てはまる」と回答し、「その答えを選んだのはなぜか」という質問に対して「目標を立てることによって意識できるようになった」や「やる気が出た」と答えた。

(3) 教師が変容する姿

児童生徒が目標を設定し振り返る授業を実施していく中で、教師にも変容が見られた(図19)。

小学校特別支援学級の教師は実践後のインタビューにおいて「授業の形を考える際に、活動やねらいを、児童が理解しやすい具体的な行動のレベルまで落とし込んで考えることに取り組んだ」と語った。また、中学校特別支援学級では生徒が個別に設定した目標を達成できるように、T2、T3の教師が具体的な助言をする姿が見られた。教師は、実践後のインタビューにおいて「工夫した振り返りシートを使用しても、生徒にそこまで変化はないのではないのかと思っていたが、思った以上に効果があって驚いた」と語り、検証後の授業でも振り返りの時間を確保し、生徒の考えが深まっていくよう授業デザインを工夫し続けている。小学校、中学校どちらにも児童生徒一人一人の姿や思いを見取り、単元計画や



図19 授業前に打合せをする教師の姿 / 中学校特別支援学級

目標、支援をその都度見直していくことを積み重ねていく教師の姿があった。これらは、児童生徒が目標設定と振り返りをし、それを教師とも共有したからこそ生まれた、教師の指導や支援の変化だと考えられた。

2 今後の課題

(1) 学習の見通しの段階について

「児童生徒が、単元目標に応じて個人の目標設定と振り返りをすることにより、学習の見通しをもって主体的に学ぶことができる」という研究仮説を立て実践を行ってきたが、小学校特別支援学級においては、単元目標を意識することが難しく、本時のめあてを意識して取り組むことに留まる児童もいた。その児童が時間をかけ、授業を重ねていくことによって、主体的に取り組む姿に変容するところまでは今回の研究で追うことはできなかった。

学習の見通しについては、単元全体を見据える段階や本時と次時とを関連して考える段階などが存在すると考えられる。発達段階も含め丁寧に見取りながら、主体的に取り組む姿への変容と関連する段階について、時間をかけて追っていく必要性が出てきた。小学校特別支援学級においては、中学校特別支援学級よりも授業を重ねていくことで、単元を意識した取り組みに慣れていく可能性は、課題として残った。実践期間を延ばし、引き続き検証することが必要である。

児童生徒がどの段階の学習の見通しをもっているのか、また、次の段階の学習の見通しをもつための手立てをどのように考えるのかを整理するためにも、特別支援教育における学習の見通しの段階について、整理が必要だと考えられた。

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

本研究に関しては、「学習の見通し」をキーワードに「児童生徒が、単元目標に応じて個人の目標設定と振り返りをすることにより、学習の見通しをもって主体的に学ぶことができる」という研究仮説を立て検証を行ってきた。個人の目標設定をする時間、学びを振り返る時間を設定することで、児童生徒自身が次回への見通しと目標をもち、学びの蓄積と共に達成へと向かう姿を見取ることができた。

中学校特別支援学級の実践の課題として、授業実践をした教師は「単元目標を達成する方法について、生徒自身で考える機会」について言及していた。今回は生徒が設定した目標に対し、教師がその達成の方法を助言し、機会を見て言葉かけを行ったが、単元の後半には、過去の振り返りシートを自ら参照するなど、自分自身で学びを調整する姿が見られた。今後、さらに主体的、対話的で深い学びの実現に向かうには、児童生徒が目標を選択したり設定したりという段階から、自ら設定した目標を達成していく方法を考えたり、多様な教材を用いてどこでどのように学ぶのかといった学び方を設定したりすることを通して、より高度な自己調整の場面を作っていくことが課題となる。例えば、対話を通して児童生徒と相談することが必要になるであろうし、自分のペースで学べたり、興味を追求できたりする場所があることも必要になるかもしれない。従来「教師が教え、児童生徒が受動的に学ぶ」というモデルから「教師は環境を整備し、児童生徒が主体的に学ぶ」モデルへ移行していきながら、教師は児童生徒の実態に応じて創意と工夫を繰り返していくことが求められる。今回の研究は、その実現へ一歩、近づくものである。

児童生徒自身で舵取りをしていくための授業の在り方について、これからの実践の蓄積を期待したい。

最後に、研究を進めるにあたり、ご支援、ご助言をくださいました武富博文先生をはじめとした講師の先生方、また、検証実践校の校長先生をはじめ学校教職員の皆様、アンケートにお答えいただいた市内の特別支援学校・学級担任の先生方皆様に、心より感謝し厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- 太田正己『知的障害教育の授業展開 「まとめ」をきちんとすれば授業の効果が上がる学習活動「見直し・振り返り」と評価』ジアース教育新社 2012年
- 武富博文・松見和樹『知的障害教育におけるアクティブ・ラーニング』東洋館出版社 2017年
- 丹野哲也・武富博文『知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメント』東洋館出版社 2019年
- 白井俊『OECD Education プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房 2020年
- 中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』 2021年
- 松田文登・松田崇弥『異彩を、放て。「ヘラルボニー」が福祉×アートで世界を変える』新潮社 2022年
- 丹野哲也・武富博文『知的障害教育におけるレッスン・スタディ』東洋館出版社 2023年
- 奈須正裕・伏木久始『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』北大路書房 2023年
- 全日本特別支援教育研究連盟『これからの特別支援教育はどうあるべきか』東洋館出版社 2023年
- 武富博文『特別支援教育のミライ』明治図書 2025年
- 東京学芸大学先端教育人材育成推進機構ブックレット③
『子どもが自ら学び始める新たな学びの探索－個別最適な学びの最前線－』学文社 2025年

【指導助言者】

- | | |
|-----------------------------------|-------|
| 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 研修事業部総括研究員 | 武富 博文 |
| 川崎市立小学校特別支援教育研究会長（川崎市立井田小学校長） | 松原 晴美 |
| 川崎市立中学校教育研究会特別支援教育部会長（川崎市立犬蔵中学校長） | 藤田みどり |
| 川崎市立中学校教育研究会支援教育部会長（川崎市立日吉中学校長） | 中川 薫 |
| 川崎市立特別支援学校長会長（川崎市立中央支援学校長） | 稲葉 武 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 雨宮 薫 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 黒江 千尋 |